

串間市文化財調査報告書第14集

市内遺跡発掘調査概要報告書

姥ノ上遺跡
万多城遺跡

1996

宮崎県串間市教育委員会

串間市文化財調査報告書第14集

市内遺跡発掘調査概要報告書

姥ノ上遺跡
万多城遺跡

1996

宮崎県串間市教育委員会

序

串間市内の各地には、縄文時代後期の下弓田遺跡や中世城郭の櫛間城跡に代表されるように各時代・各種の遺跡が点在しておりますが、串間市教育委員会ではこれらの遺跡が串間地方の歴史を知る上での貴重な資料であるとともに未来へ残すべき文化遺産であるとの認識に立ち、その保護や活用に努めることが現代に生きる者の責務であると捉えて取り組んでおります。

ところで近年は各種の開発事業が増加しておりますが、事業地内に遺跡が所在する場合、その取扱いについての調整が文化財保護と開発行為との間で大きな課題となっております。このような状況から当教育委員会では開発等の行為が遺跡へ影響を与えることが考えられる場合には事前の試掘調査を実施し、遺跡の所在の有無、性格、範囲等についての資料を集めて報告書を作成し、協議資料としております。

本年度は姥ノ上遺跡及び万多城遺跡において調査を実施し、報告書を刊行することとなりましたが、当報告書が文化財保護への理解に役立つとともに、社会教育・学校教育等の場で広く活用されれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施にあたって御協力いただきました関係諸機関及び市民の皆様に対して心より感謝申し上げます。

串間市教育委員会
教育長 岩 下 斌 彦

例 言

1、本書は、宮崎県串間市教育委員会が国県の補助を得て平成7年度に実施した市内遺跡発掘調査の報告書である。

2、発掘調査は市内に所在する遺跡の内、携帯電話用電波塔の建設計画のある大字西方字姥ノ上の姥ノ上遺跡、住宅建設計画のある大字西方字石仏の万多城遺跡について確認調査を実施したものである。

3、遺跡の名称は字名あるいは通称を使用している。

4、発掘調査は、串間市教育委員会が主体となり、同主事宮田浩二が担当した。

5、調査組織は以下のとおりである。

調査主体	串間市教育委員会
教 育 長	岩 下 斌 彦
社会教育課長	岡 田 弘 一
文 化 係 長	川 野 荒 (庶務担当)
主 事	宮 田 浩 二 (調査・執筆・編集担当)

6、報告書中の方位は磁北である。

7、出土した遺物は串間市教育委員会で保管している。

本文目次

第I章 姥ノ上遺跡	
1、遺跡の位置と環境	1
2、調査に至る経緯	1
3、調査の内容	1
第II章 万多城遺跡	
1、遺跡の位置と環境	3
2、調査に至る経緯	3
3、調査の内容	4
4、遺物	4
5、小結	5
報告書抄録	10

挿図目次

第1図 姥ノ上遺跡位置図	1
第2図 万多城遺跡位置図	3
第3図 調査概要図	5

図版目次

図版1 姥ノ上遺跡写真	2
図版2 万多城遺跡写真	6~7
図版3 万多城遺跡出土遺物写真	8~9

第1章 姥ノ上遺跡

1、遺跡の位置と環境

姥ノ上遺跡は串間市大字西方字姥ノ上に所在する。同地は串間市街地の西側に展開する標高約25mのシラス台地（通称善田原）上にあたり、この南東（台地縁辺部）にはJR日南線を挟んで慶長十二年（1607）の建立とされる正国寺が存する。善田原台地は古墳時代を中心に、銭亀塚古墳、唐人町遺跡、崩先地下式横穴群等の遺跡の所在地として知られており、この他各種の遺跡が点在する可能性の濃厚な台地である。

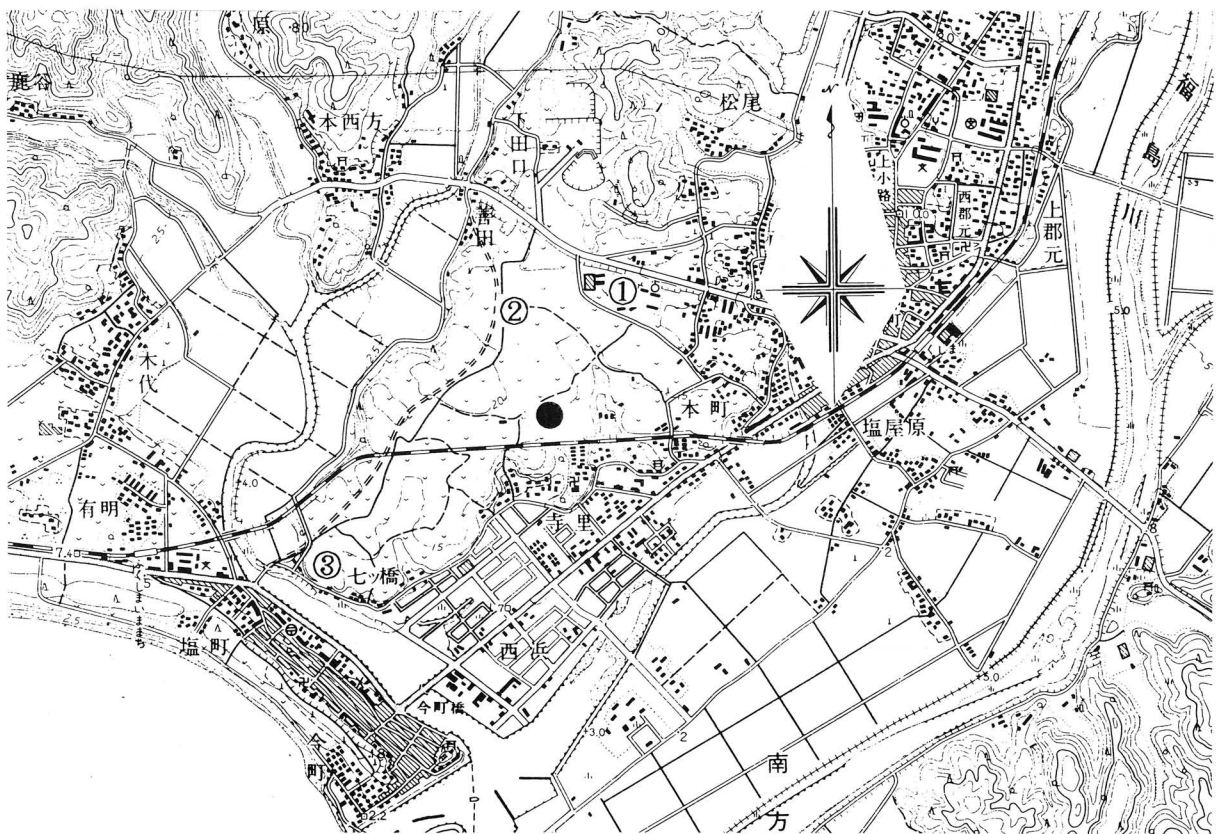
2、調査に至る経緯

遺跡の位置と環境の中で述べたように善田原台地上には多くの遺跡の所在が考えられ、また、調査対象地を含む地域も遺物の散布が認められていた。

平成7年11月上旬、携帯電話用電波中継塔を建設したいとの主旨で同業者が来庁し、遺跡の有無等についての照会があった。協議した結果、当地の試掘調査を施し、その結果によって再度協議を持つこととした。試掘調査は平成7年12月14日から15日にかけて実施した。

3、調査の内容

調査対象地となったのは字姥ノ上所在の平坦な畑地中の180㎡で、ここに2本のトレンチ（1m×3m）を設定して調査を実施した。同地の土層は、表土の下位に約1m50cmの客土造成（5層に分離できる）が見られ、それ以下が自然堆積層であった。自然堆積層の残存状況は割に良いものであったが南西方向に若干傾き、一部をアカホヤ火山灰層下位まで掘り下げたが、結果として遺構の検出、遺物の出土は見られなかった。



第1図 姥ノ上遺跡位置図(1/25000)

●姥ノ上遺跡 ①銭亀塚古墳 ②唐人町遺跡 ③崩先地下式横穴群

図版 1

姥ノ上遺跡写真



遺跡遠景



第 1 トレンチ



第 2 トレンチ

第II章 万多城遺跡

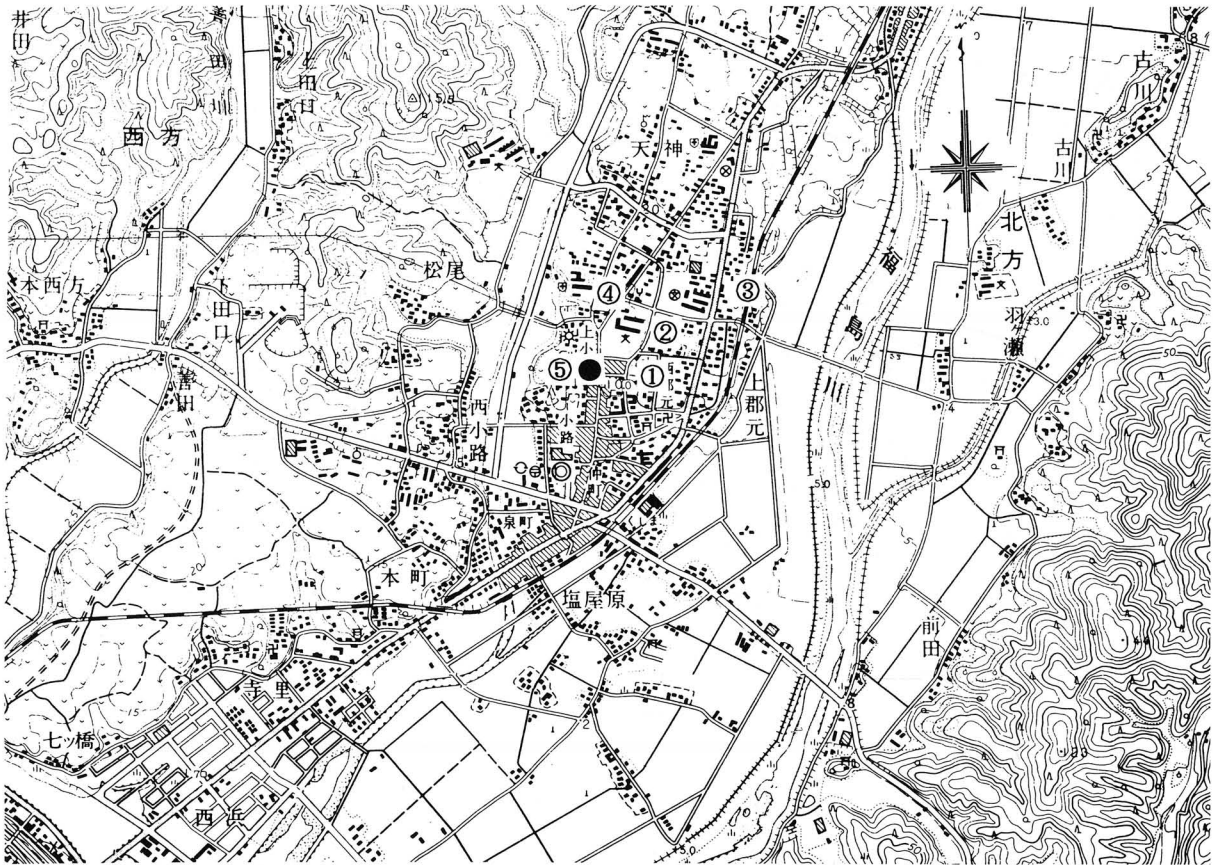
1、遺跡の位置と環境

万多城遺跡は串間市大字西方字石仏に所在する。串間市街地のほぼ中央部にあたるこの地域は平均標高15mほどのシラス台地で、歴史的に串間地方の中心的役割を果たしてきた地域である。旧福島町時代の昭和8年には町内に所在の19基の古墳が県指定となっているが、現在では福島小学校を中心にしたこの地域に残存する次の5基が形状を見ることのできる古墳として残存しており、遺跡はこの中の10号墳の東側に隣接する畑地に位置する。

- ①3号墳（通称；長清見塚）円墳
- ②4号墳（通称；剣城塚）前方後円墳
- ③5号墳（通称；毘沙門塚）前方後円墳
- ④9号墳（通称；霧島塚）円墳
- ⑤10号墳（通称；万多城塚）前方後円墳

2、調査に至る経緯

遺跡の位置する畑地は私有地である。平成7年11月、地権者より10号墳と畑地との境界を明確にしてほしいとの依頼があり、その協議の中で地権者が畑地を土取りした上で住宅を建設する計画であることを聴取した。協議では、古墳法面崩落の心配から境界線より1m50cmほどを残すことなどが話し合われたが、他の土取りする部分についても周溝等の古墳関係の遺構の存在する可能性、また、地理・地形的に各時代の遺構・遺物を包蔵することが考えられたため事前の試掘調査を実施することとなった。調査は平成8年2月14日から平成8年2月28日にかけて実施した。



第2図 万多城遺跡位置図 (1/25000)

- 万多城遺跡 ①3号墳 ②4号墳 ③5号墳 ④9号墳 ⑤10号墳

3、調査の内容

調査は基本的にトレンチ法によって実施した。8本のトレンチを古墳の縁から放射状に設定したが、トレンチ内の状況から調査対象地の北東部にグリッドを設けて遺構の確認を図った。当地の現況は畑地であるが、過去には繰り返し土地利用がされたようで土層には切土・盛土が激しく見られ、自然堆積層は最下層部の一部に残るのみとなっていた。調査の概要は以下のとおりである。

(1) トレンチの調査

第1トレンチ

調査対象地の最も南側にあたるトレンチで、古墳の縁部から東に向けて設定した。東へ向かうほど造成土が厚く、数回にわたる造成が繰り返されている。また、旧地形は東側に向けて床面をアカホヤ底部とする面とアカホヤ直下の暗褐色とする面とATとする面の3段の階段状を呈しており、これらは人為的な遺構と見受けられる。

第2トレンチ

第1トレンチの北側に平行して設定した。第1トレンチで検出した段状の地形はここでも見られ、土層はやはり造成土が厚く、遺物としては土器・土師器・土師質土器・陶器が見られる。

第3トレンチ

第1第2トレンチと同様の状況であるが、2段目と3段目の境界でこの段差を壊すようにピット3本が検出され、この内の1本からは土器及び土師質土器が出土している。

第4トレンチ

アカホヤ底部を床面とする1段目は第1トレンチより続いているが、以下の段状地形は明瞭でなくなる。

第5トレンチ

第5トレンチから第8トレンチまでは南西から北東方向に向けて設定した。第5トレンチでは南側から延びてくる前述の1段目が古墳の形状に沿うように検出され、他にもう1段のATを床面とする段差が検出されたが、これは後にグリッドを掘り下げた時点で検出された北方向から南方向への溝状遺構に伴うものであった。なお、上層の造成土からは五輪塔の火輪部2個が出土している。

第6トレンチ

第5トレンチと同様の状況であるが、ここでは上層部で五輪塔の空風輪部が出土している。

第7トレンチ

ここでは第1トレンチより続いてきたアカホヤ底部を床面とする段が消滅しているが溝状遺構に伴う段差は明瞭に現れる。また、トレンチの中央部では砂岩質で人頭大の礫群が出土し、中の1個は空風輪のようである。

第8トレンチ

床面での状況は第7トレンチと同様であるが、近代に小さな鍛冶屋があったとの場所で、焼土や鉄滓等が上層に多く見られた。

(2) グリッドの調査

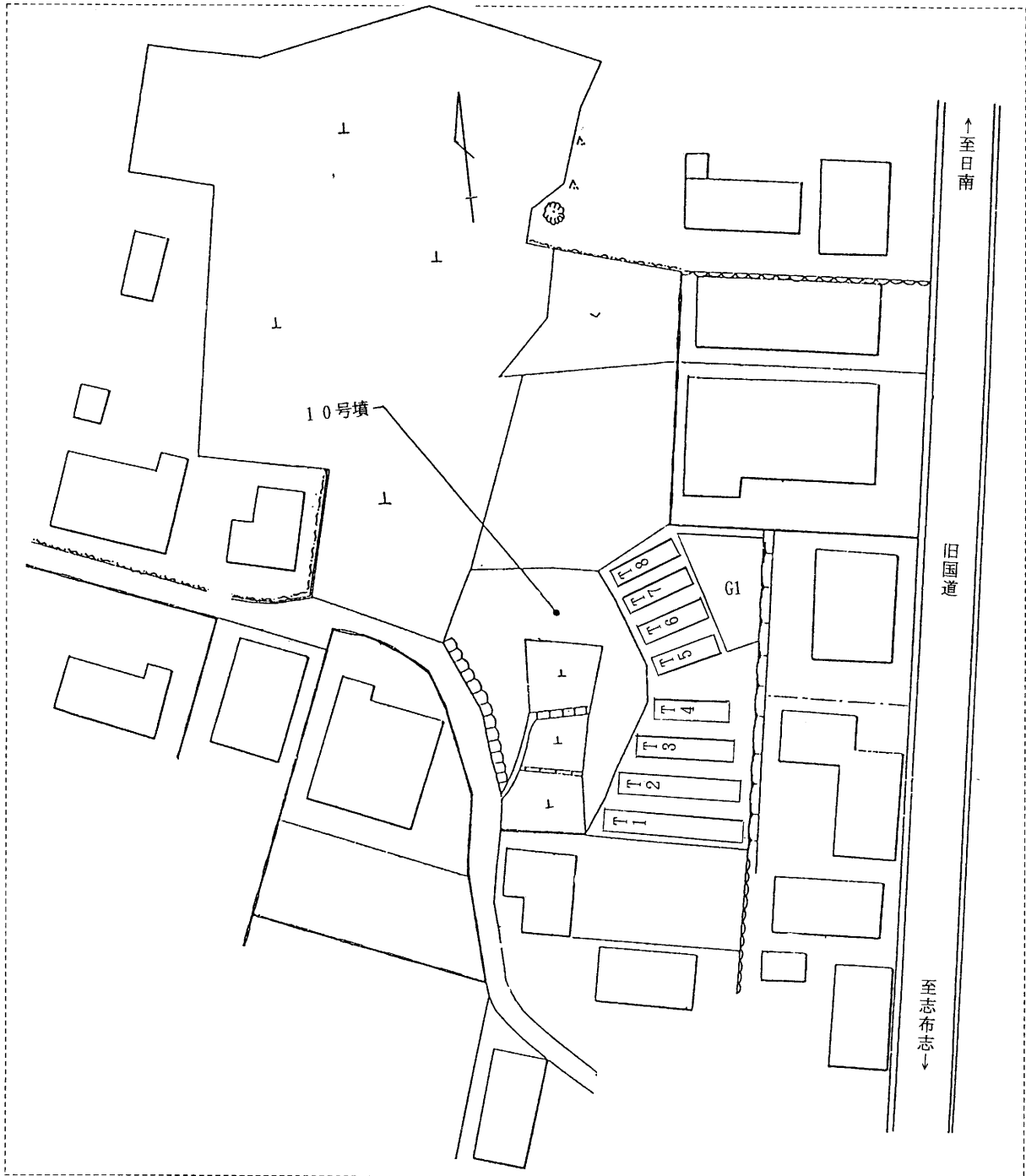
グリッドは遺跡の北東部に設定した。ここでは第5から第8トレンチで検出のATを床面とする段差を西側の縁部とする幅約2mの溝状遺構が検出された。遺構は北方向から南方向へ続いており、方向や掘り込みの形状の違いから第1から第3トレンチまでに見られたATを床面とする段差とは対応しないようである。遺構の埋土は造成土が厚く底部にややレンズ状の自然堆積と思われる黒色土が薄く見られ、造成土からの遺物は縄文土器片から土師皿まで多期にわたり、遺構の時期の特定には至っていない。また、遺構内及び遺構東側ではATと硬質暗褐色土を検出面としてピット群を検出しているが、これらからの遺物の出土は見られず、時期あるいは溝状遺構との前後関係についての特定には至らなかった。

4、遺物

遺物としては縄文土器片・土師器・須恵器・土師質土器・陶磁器・打製石斧等が出土しているが、これらは造成土を中心として混在する状況での出土であり、各時期の包含層として捉えられるものではなかった。割合としては土師質土器が多く、これ以後に土層が攪乱されているようであるが、縄文土器や打製石斧6点が出土していることから、階段状の遺構やピット群などに見られる土地利用は縄文時代から続いていたものと思われる。

5、小結

今回の調査は、対象地が10号墳に隣接することから、関連遺構の存在や古墳築造の時期についてを主眼において実施した。10号墳は前方後円墳とされ、南側に存したとされる前方部を消失しており後円部が円墳状に残存している古墳であるが、検出された階段状や溝状の遺構は状況的に10号墳に伴うものと確認するには至らなかった。しかしながら土師器や須恵器の出土は、これまで出土品・副葬品が明らかでなかった10号墳の築造時期等についての一助となるものと思われる。



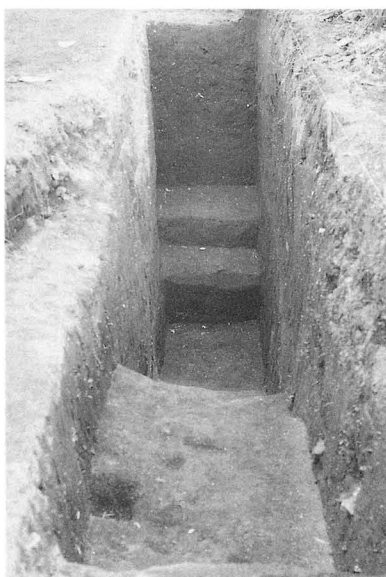
第3図 調査概要図

図版 2

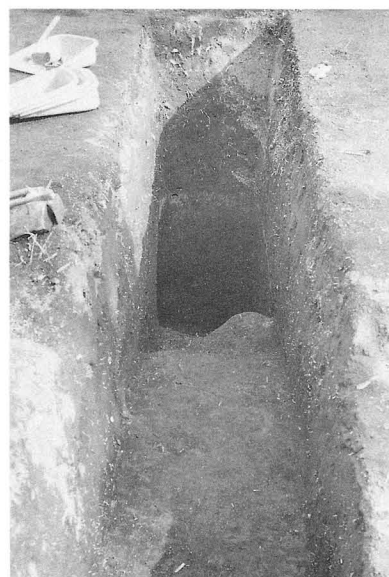
万多城遺跡写真



調査全景



第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ



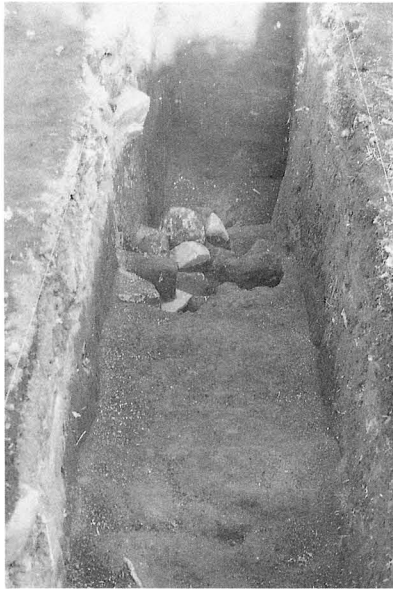
第4トレンチ



第5トレンチ



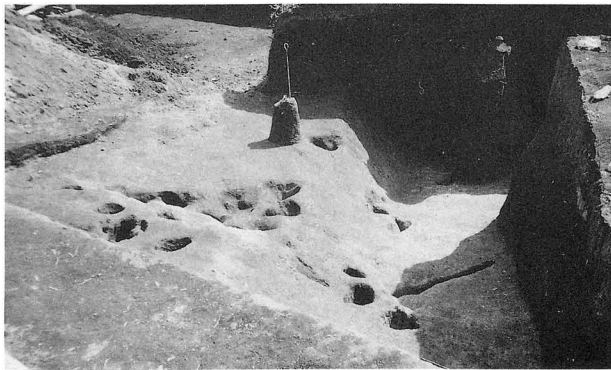
第6トレンチ



第7トレンチ



第8トレンチ



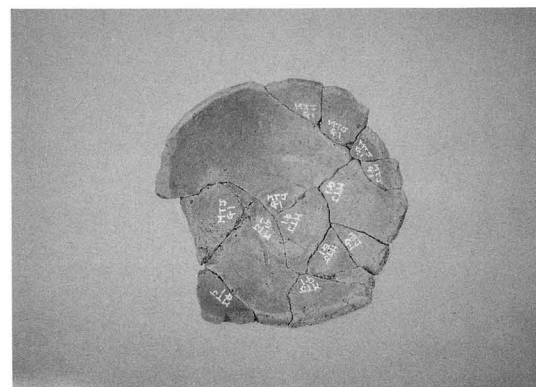
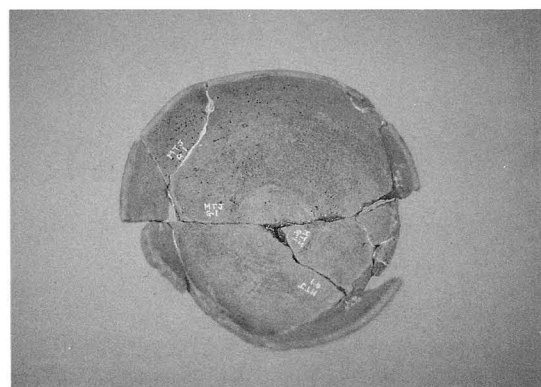
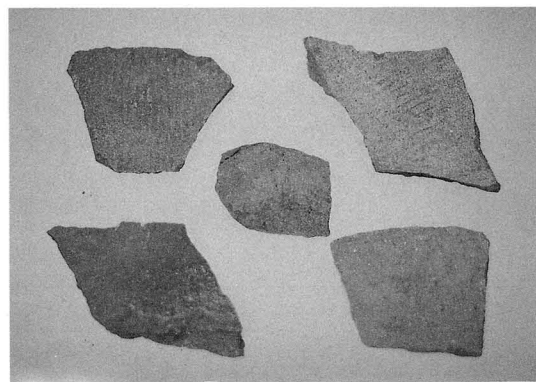
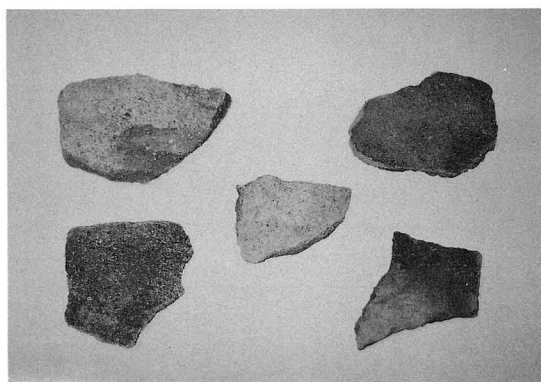
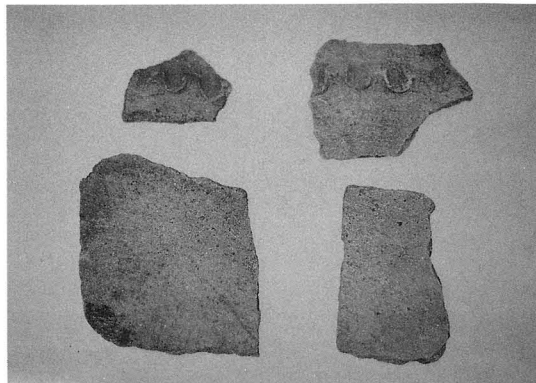
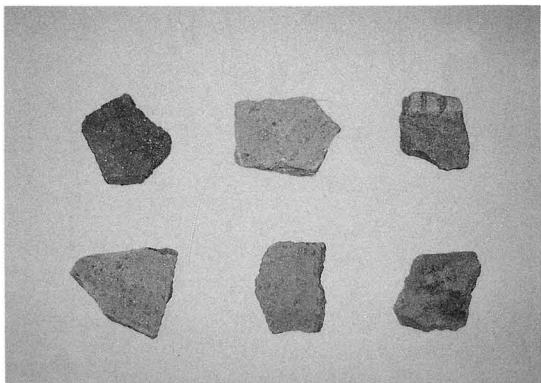
グリッド

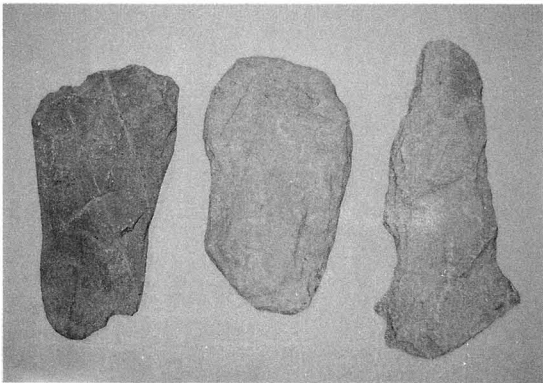
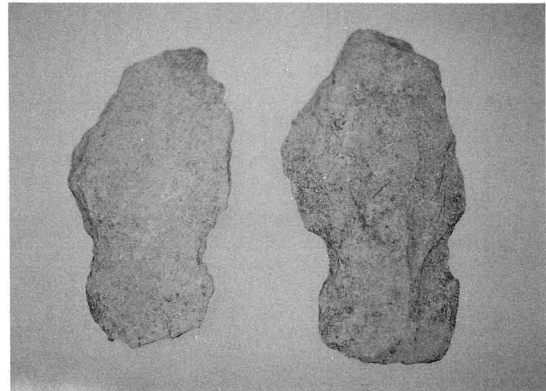
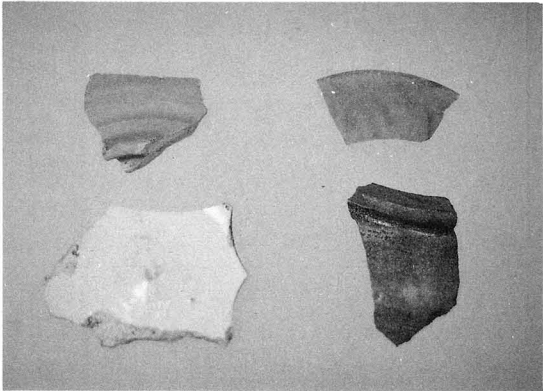
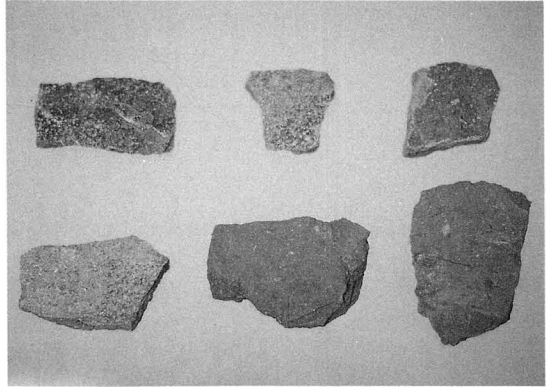
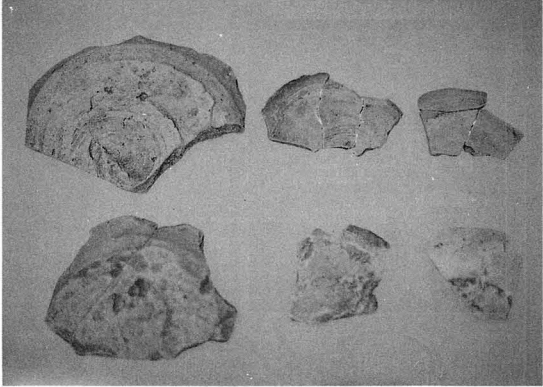


グリッド出土の土師皿

图版 3

万多城遺跡出土遺物写真





報 告 書 抄 録

フリガナ	ウバノウエ マンタジョウ
書名	市内遺跡発掘調査概要報告書 姥ノ上遺跡 万多城遺跡
シリーズ名	串間市文化財調査報告書
シリーズ番号	第14集
編集者名	宮田浩二
発行機関	串間市教育委員会
所在地	串間市大字西方6524 - 58
発行年月日	1996年3月29日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ウバノウエ 姥ノ上遺跡	クシマ 串間市大字 ニシカタ ウバノウエ 西方字姥ノ上	31°27' 30" 付近	131°13' 10" 付近	1995/12/14) 1995/12/15	10m ²	携帯電話 用電波塔 建設計画

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	不詳	なし	なし	

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
マンタジョウ 万多城遺跡	クシマ 串間市大字 ニシカタ イシボトケ 西方字石仏	31°27' 50" 付近	131°13' 50" 付近	1996/2/14) 1996/2/28	150m ²	住宅建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文・古墳・平安	溝状遺構・柱穴	土器・打製石斧・ 須恵器・ 土師質土器	

串間市文化財調査報告書 14 集
市内遺跡発掘調査概要報告書

姥ノ上遺跡
万多城遺跡

1996年3月

発行 串間市教育委員会
印刷 (有)串間新生社印刷